

ジャーゴン失語症をめぐる

フランソワ・レールミット先生

との一問一答——一つの研究交流の記録

恒川邦夫

本稿は、本年四月末に、紀伊國屋書店から出版された共訳書『科学者たちのポール・ヴァレリー』⁽¹⁾の翻訳作業の副産物である。原書は1983年に編纂・出版された書物で、当代一流の科学者たちにそれぞれの専門分野からポール・ヴァレリーを語らせるというユニークな企画の論文集であった。当時、東京大学文学部仏文科教授であった菅野昭正先生（筆者の恩師の一人）が翻訳を思い立ち、若輩の筆者に声をかけられたのが、正確にいつのことであったか記憶に定かでないが、かれこれ十年くらい前のことではなかったかと思われる。多忙と怠惰（あるいは筆者にあっては《多忙という名の怠惰》）が原因で、翻訳作業は一向に開始されず、立ち消えになりそうになったところで、先生が同学の若手を二名仲間に加えることを提案なさり、ようやくエンジンがかかったのが足掛け3年くらいまえである。

筆者の二年におよぶ在外研究期間をはさんで、お互いに声をかけあい、翻訳に励んだところ、昨秋になってやっと出版のめどがつくところまでこぎつけた。訳者はみなヴァレリーの専門家だが、数学、物理学、化学、生物学、医学の専門分野の知識に関してはまったくの素人である。お互いに自分の手もとに送られてきた他の訳者の原稿のコピーに目を通して、何か分かりにくいところがあったら遠慮なく指摘しあって、正確かつ読みやすい文章を心がけて世に送りだそうという方針であった。そういう中で、菅野先生担当の失語症患者の朗読を引用した一節の翻訳のワープロ原稿をみて一驚した。原書の60頁から61頁にかけての行数であるが、とんと分からないのである。原文は次のごとくである。

Des jargons tels que celui-ci: “[...] le saint bronne de trou mauvaise lorsque les nouvelles qui démordent et compoule comme tout d’un saint andiforme. . . Notre but, sait tout d’abord sa conforme en comporte la sébelsion. . . dans la débolesse massive comme un symbole marsié aux tréformes théoriques” commencent à être décodés.

全体としての文意は「……というようなわけの分からない言葉が解読されはじめている」ということだが、分からないのは「……」で示したまさに《わけの分からない言葉》の（原文では引用符で囲まれた）部分である。菅野先生の訳文⁽²⁾がどうこうという問題ではない。原文

の意味がまったく分からないので、日本語に移しかえようがないのである。訳文はそこそこにして、訳注を施して読者の理解に資したいところであるが、原書に注がほどこされていないので、訳者自身の理解がおぼつかない。思案の末、筆者は著者に手紙を書くことにした。「レールミット先生に質問」と書かれた10月19日付けの備忘録のメモが手もとに残っているが、実際に手紙を出したのは10月24日のことであった。筆者はそれからしばらく大変忙しく過ごした。10月の末日から11月の初めにかけては郡山の奥羽大学で学会があった。幹事長の筆者は合同役員会や臨時総会を切り盛りする立場にあったし、六月に始まったフランスの核実験再開に対して学会がきちんと意志表示をすべきだとするグループの対応にも頭を使わなければならなかった。奥羽大学からもどると、なか一日おいて、サンフランシスコで開かれるポール・ヴァレリー国際シンポジウムに出かけた。7日に帰国すると、2、3日おいてレールミット先生から9日付けの封書が届いた。以下はその後の顛末記である。

1

中から出てきたのは先生の肩書きと住所が印刷された大判の名刺一枚であった。余白の部分に万年筆で走り書きがあった。文面は以下の通りである。

「先生、そして、親愛なる^{コレージュ}学友、

あなたのみごとなお手紙を、今朝がた拝受したばかりのところですよ。詳しくご返事をさしあげる所存です。その詳細をお読みいただければ、日本の読者もいかにしてこうした《驚くべき》ジャーゴン失語症が、左脳を損傷された右利きの人に、かなりの頻度で発生するかご理解いただけるでしょう。

どうか一週間ばかりの時間的余裕をお与え下さい。果たすべき先約が色々あって、動きがとれないのです。

なんとあなたの《フランス語》はみごとなことでしょう！ ご質問が《質問するに値しない》などとお考えになりませんように!! 敬具。 レールミット」

この最初の短い手紙(?)の文面からも、どことなく人なつこい、飾らない性格がうかがわれる。11月18日にはパリのコレージュ・ド・フランスで、退役軍医でヴァレリー研究家のDr. エノー氏が企画した国際シンポジウム「ヴァレリー：真昼の分割——《正^{ミディール・ジュスト}午》」⁽³⁾が行われることになっており、主催者から送られたきたプログラムにレールミット先生の名前がある。先生はそこで閉会の辞を述べることになって

いる。「果たすべき先約」とは、たとえば、そんなことかと合点がいった。

やがて11月27日になって、短いメッセージがファックスされてきた。「やっと、26日から10月24日付けの先生のファックスにきちんとお答えする時間が取れることになりました。遅くなってすみません。親愛の情をこめて。あなたのフランス語の堪能さにあらためて敬意を表します」という文面であった。しかし、実はそれから長かったのである。次に先生から連絡があったのは、年の瀬もおしこめた12月27日になってのことである。最初に露払いよろしく若い秘書の声で「これからファックスを送ります」と電話がかかり、しばらくすると「恒川邦夫先生。ジャーゴン失語症についての解説、本日パリから郵送しました。フランソワ・レールミット」というメッセージが流されてきた。そして青いインクの万年筆で書かれた長文の手紙が届いたのは、ほとんど大晦日のことではなかったかと記憶する。

送られてきた手紙の中味を紹介する前に、先生のプロフィールをWho's who in Franceの記述にしたがって簡単にみておこう。先生は1921年3月4日パリ生まれ、名門校リセ・コンドルセからパリ大学医学部にすすんだ。父親のジャン・レールミット（故人）も医学部教授で、国立医学アカデミー会員とあるから、すくなくとも親子二代にわたる医学者の家系であることがわかる。1960年から90年まで、サルベトリエール病院の神経学科・神経心理学科の科長をつとめ、62年から90年までパリ大学医学部教授として勤務、90年に定年で退官した。さまざまな委員会や組織の委員長・会長・副会長を歴任しているが、75年にフランス学士院の一人文・社会科学アカデミーの会員に選ばれ、88年には父親につづいてフランス医学アカデミーの会員に選ばれている。一口に言って、先生は毛並みのよい、功なり名とげた医学部教授、国際的に名の知られた神経心理学の権威といったところであろう。

さて先生の長い手紙を翻訳して紹介すると以下の通りである。

「先生、そして、親愛なる^{コレージュ}学友、

やっと少し休みがとれましたので、この機会を利用して、先生の10月24日付けの丁寧なお手紙にご返事をさしあげようと思います。退職の身であることもあり、その方が速いので、手書きのお便りにさせていただきます。

非常に複雑な問題ですが、なるべく分かりやすく説明したいと思います。

(1) 1964年にTh.アラジュワニーヌと一緒に、《失語症》患者における《ジャーゴン失語症》の事例を研究していて、音素（あるいは音節）レベルの錯語と単語レベ

ルの錯語（《ビシクレット [自転車]》を《アリュメット [マッチ]》と取り違えるような語形的なもの、《めがね^{リュネット}》を《顕微鏡^{ミクロスコープ}》と取り違えるような意味論的領域に関わるものがある）を区別することを思いつきました。こうした区別が可能だったのは、通常あらゆるタイプの錯語が混入する《ジャーゴン失語症》の症例のなかに、いわゆる音素レベルの錯語が支配的（ないしはすべて）であるケースと意味論的な錯語が支配的（ないしはすべて）であるケースとが存在するからです。

(2) 1967年から1972年にかけて、当時サルペトリエール病院の私の医局の客員研究員であったアンドレ・ロックニルクール（モンリオール）と一緒に、錯語症のありうべきすべてのタイプについて、これまでにない徹底的な調査を試み、コンピューターを駆使して症例を統計的に整理しました。その結果、錯語の発生に関する理解が飛躍的に進歩したのです。

(3) その時のデータは、それぞれ論文の形にまとめられて随時発表されましたが、その後で、A.-R. ルクールと共同で、《失語症》についての本を一冊書いて、集大成したわけです。

その本というのは、アンドレ・ロックニルクール、フランソワ・レールミット著『失語症』、フラマリオン医学—科学叢書、パリ、1979年、655頁です。英語版はアンドレ・ロックニルクール、フランソワ・レールミット、ボニー・ブライアンス著『失語症』、バイリエール・ティンドール出版、ロンドン、1983年、484頁です⁽⁴⁾。（翻訳に関しては、ボニー・ブライアンスの協力が大きかったと思います。）

ただし、この本を注文する必要はまったくありません。これは失語症の専門家向けに書かれた本です。訳書のなかでこの問題について何か記しておくということなら、フランス語版と英語版の両方を参考文献として掲げておけば足りるでしょう。

*
**

先生のご質問に正確に答えるのは難しい、というか、不可能でさえあります。1/『精神の機能』のなかの引用は、全体はもっと長く録音されたものの一部で、読んだのは女性患者、テキストはシャト—ブリアン、しかし、どういう文章であったか記録してありません。この点については後でもう一度ふれることにします。

その前に、簡単な例で、どういう変形が起こるのかということを概略ご説明したいと思います。

A/音素レベルの錯語：（単語の読み）

complexe → complexe

inactif → inactik
 ↑ ↓
 psychologie → psychoslogie
 ↑ ↓ ↑ ↓
 épicerie → ésiprie
 ↑ ↓
 malhabile → amalabime
 ↑ ↑ ↑
 ↓ ↓ ↓

等々。

B/単語レベルの錯語

①語形的：

繰り返し bicylcette [自転車] → allumette [マッチ]
 または République [共和国] → publi...そして publicité [宣伝]
 日常言語 artilleur [砲兵] → horticulteur [園芸家]
 [への転換]

②意味論的：

最近のアメリカ合州国の大統領選挙に関する会話の例。

《とくに国^{バルチ・アンテリウール}内^{アフエール・アンテリウール}党 [“国内問題” というべきところを] に取り組んできた。そして分かったことは、ほかはどこでも、彼らは小行商人を配置して、可能だった、上着で……ではなくて……火薬……粉末でもって……、つまり最後の審判を形成するために、最良の粉の行商の外套でもってということです》⁽⁵⁾ (英語版, 45 頁)

C/^{ネオロジスム}新語：音素レベルでも、単語レベルでも、錯語としてはきちんとした説明がつかない場合。

あらゆることが考えられます：短音節のものから n 音節のものまで。

*
 **

『精神の機能』のなかに一部引用されている症例記録に話をもどしましょう。

1/もとのテキストは『墓のかなたからの回想』*Les Mémoires d'outre-tombe* の一節です。どこかは分かりません。しかし、この新語とあらゆる種類の錯語が混入した誇張体は、シャトーブリアンの個性的な文体の影響を示しています。

2/『精神の機能』のなかの引用は『失語症』にある症例記録の一部ですので、フランス語版 53 頁 (英語版では 30 頁) にある記録の全体を対象にしようと思います。以下

に、症例記録全体を書き写し、行間に可能な解釈といくつかの確実に特定できる変形についてのコメントを記してみます。各種下線の意味については、後の説明を参照して下さい。

Lorsque nous l'essayons, le saint bronne de trou mauvaise lorsque les

注 1

nouvelles qui démordent d'une fin dans l'autre. Il étatborde d'abord

? (débordent) ?

un fort dans lequel il était. Dans chaque étome respulte, se comporte et

compoule comme tout d'un saint andiforme comme personne. Notre but sait

?(c'est)?

tout d'abord sa conforme en comporte de sébelsion. D'abord, comme tout

déborde dans la débolesse massive comme un symbole marsié aux tréformes

théoriques. Comme dans chaque sibande, Monsieur, qui ne parcourt ni

d'une façon... comme le symbole, trou prasuve peut, lui-même, être parti

注 2

quelque part... (1970年4月, Pe...嬢の朗読。)

N. B. もとのテキストは高校生向けに編集されたシャトーブリアンの名文選の一節でした。それが何であったかは思い出せません。

説明：

① おそらく原文通りに読んでいる箇所

② ^{ベルセヴエラシオン} 保 続。他のいくつかの論文で、患者がずっとしゃべりつづけている場合、保続が現れる間が10秒から15秒くらいあくことがあることを示した。神経生理学的には、そうした保続はまったく問題なく説明できる。

私の考えでは、このテキストの最初にでてくる《le saint bronne de trou mauvaise》(注1)と終わりの方にでてくる《le symbole trou》(注2)の間には、一つの(変形された)保続現象が存在する。そのことは別の論文で示した。

③ ——— 起源不明の新語。

? () ? 可能な解釈という意味で、それ以上ではない。

- ④ o や or の頻度に注意。他にも、フランス語に特有の音素や音 (例: de) の頻度にも注意をはらう必要があるだろう。
- ⑤ 終りの方にてでくる《Monsieur》はおそらく別の語の代用だと思われる。だとすれば、必然的に、(意味領域が重なる) 固有名詞の代用であろう。

*
**

[手紙の続き]

もとのフランス語のヴァージョンと英訳とを比較してみると、ジャーゴ的な側面が英訳では完全に消えてしまっていることが分かります。フランス語ヴァージョンの一見して詩的な味わいについても同様です。これは当然です。音が音をよびこむような協調関係、音韻 (あるいは音素) レベルの執拗な反復によって、フランス語ヴァージョンは朗唱に耐えるテキストになっています。英語ヴァージョンは驚くほど平板です。フランス語の「単語」がすべて英語の単語に訳されていて、新語も単純な移しかえにすぎません⁽⁶⁾。

私はどうもまちがっていたようです。英語版には、もとのフランス語ヴァージョンを出したうえで、その英訳を掲載すべきでした。この過ちに気づいたのは、先生のおかげです。

先生は私の轍を踏まないようご注意ください。アドバイスとして次のことを申し上げます。

1/私が本状に書き移したとおりのフランス語ヴァージョンを全文掲載すること。その上で、日本語訳については、次の2つの方針に従う。1/言語学的に異論の余地なくフランス語と認定される部分、ということは私が点線で示した部分については、きちんとした日本語訳をつけること。2/ジャーゴン化され、少なくとも執拗な反復を示す音については、先生のような両方の言語に通じた目でみて、そうした反復によって醸成される音の響きとメロディーに近い日本語の音素ないしは音を見つけること⁽⁷⁾。(たとえ中に正しいフランス語が混じっていても、ジャーゴン化されている。私には、《O》や《OR》は(《OU》も同様だが)《démordant》, 《d'abord》, 《fort》等々のことばの中に入っているが、あきらかに保続現象と考えられる。)

以上のアドバイスに従えば、私たちが英語版でおかした過ちを先生は避けられるでしょう。

シェイクスピアを翻訳するのは大変です！ ヴァレリーも然り！ ジャーゴンを訳すのはさらに大変です。おまけに、ヴァレリーとサン・ジョン・ベルスの大ファンで

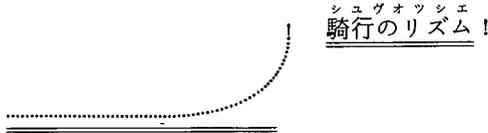
ある(好きな詩人は他にもいますが)私には、「若きパルク」や「鳥たち」といった詩⁽⁸⁾の翻訳はいかにして可能かという問題に大いなる関心があります。

記憶のままに引用します。

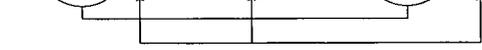
① Lumière ou toi, la mort, que le plus prompt me prenne!

[大意：光よ，あるいはおまえ，死よ，いずれか速いものが私をとらえるがいい]

これは12音節詩句ですが，冒頭の2音節を除くと，残りの10音節は1音節1語になっています。したがって，朗読は図示するように尻あがりになります。



② Où traîne-t-il, mon cygne, où cherche-t-il son vol?



[大意：どこへすべりゆくのか，わが白鳥よ，どこから飛び立とうとするのか?]

さらに《ol》は文字通り飛び立つのです。

③ Entre la rose et moi, je la vois qui s'abrite



Sur la poudre qui danse, elle glisse et n'irrite



[大意：バラと私のあいだに，私は自分の影が身を寄せるのを見る

塵埃の踊る上を，影はすべり，〔葉ずれの音も〕させずに]

こうしたメロディーを他の言語でどのように表すのでしょうか。

もしかしたら，先生の立場の利点はむしろそこにあるのかもしれない。先生は意味にとらわれる必要もないし，意味を持たない言葉にとらわれる必要もないからです。要するに，いくつかの正しいフランス語の言葉を尊重し，それが音の選択 (o, or 等) に関して一定の役割を演じることがわかれば，あとは音の織りなすメロディーだけを

問題にすればいいのです。

親愛なる恒川先生、もうこれ以上申し上げることはありません。もし先生が私のアドヴァイスを採用され、私のイニシアティヴでそうしたと責任の所在を明確にすることをのぞまれるのであれば、どうぞそうなさって下さい。私がかまいません。というのも、失語症の専門家として、また詩の愛好家として、私は自分が真実をつかんでいることを確信しているからです。真実？ そうです、自分が真実をつかんでいると思えることはごくまれなことです。しかしこの問題に関しては、はっきりしています。

また何かあれば、いつでもお答えいたします。

先生にお手紙を書くのは喜びです。

今回は、ファックスよりも手紙がよいと判断しましたが、ファックスをおのぞみならば、番号は次のとおりです。パリ、40.51.....。

衷心からの親愛の情をこめて、また、いつかお会いできることを願いつつ、

レールミット

追伸。

1970年にテキストを読んでいる最中のこの女性患者のことを私はよく覚えていません。

彼女の声は一つの壮大なメロディーによって高揚していました。はたして彼女は読みながら何か理解していたのでしょうか？ 何かを理解していたことは、絶対まちがいありません。全部を理解していたかといえば、まちがいはなくノーです。どうしてそう言えるのか？ 患者に対して発されたさまざまな簡単な命令がきちんと実行されたからといって、こういう難しいテキストの理解に関しては、何の保証にもならないはずで

印象に残っていることが二つあります。1/何かの戦闘あるいは戦場場面 2/高波。

しかし、それもメロディーとしての記憶にすぎません。きわめて重要なことですが、メロディーが保存されるのは、右利きの人の場合右脳の働きによるからで、それは言語機能をつかさどる部位とは違うからです。

*
**

突然、細かいことを一つ思い出しました。かつて私が患者に読ませていたパッセージ、それはいつも同じ、本から破り取ったページの一節ですが、シャトーブリアンはそこで《aurochs (=オーロック、今日の家畜牛の祖先とされ、17世紀に絶滅したとされるウシ) と veaux marins (=アザラシ)》という言葉を使っていたという記憶です。これだけの情報では、残念ながら、そのパッセージを割り出すには不十分だと思えます。

原典を覚えていないのはどうしてかということ、当時の私の関心がひたすら《^{デューブローブル}解読可能なもの》、つまり、単純なものへ向けられていたからだと思えます。残念ながら。」

2

さて、この懇切丁寧な手紙を受け取って、私がまずしたことはシャトーブリアンの『墓のかなたからの回想』*Mémoires d'outre-tombe* を通覧して、レールミット先生が患者に読ませたという原文を探すことであった。しかしこれは大著であって、大海の底に沈んだ小石を探すのにも似て、いかに斜め読みにしたとしても、そう簡単に見つけられるものではない。それでも先生の記憶を信じて、図書館から借りだした2種類のエディション（一つは2巻本、もう一つは4巻本であったと記憶する）にあたってみた。シャトーブリアンは名文家としての聞こえの高い作家である。斜め読みのつもりがついひきこまれて読みふけてしまうこともしばしばあった。オーロック（牛）やアザラシという言葉が出てくるということなので、アメリカへ渡る船旅の記述やアメリカ大陸北部の原野や森林地帯の見聞録をとくに注意して読んだ。しかし、一週間たっても見つからない。もしかしたら他の作品ではないかと疑い始める。シャトーブリアンの全集が相手となると、もうとても手作業では無理である。そこでコンピューターによるデータベース検索に強い友人に電話で相談した。フランスにあるフランクテキストという大きなデータベースにアクセスすれば、シャトーブリアンなら auroch と veaux marins をキーワードにして検索可能であろうという心強い返事であった。事実、それから数日後に、回答がファックスで寄せられ、シャトーブリアンの文章が特定されたのである⁽⁹⁾。しかし、それで、すべてが釈然としたわけではなかった。その間の事情は、私が1月29日付けでレールミット先生に送ったファックス（原

文フランス語)を読んでもらうとはっきりするので、以下に引用する。

「親愛なる先生,

1995年12月24日付けのお手紙拝受いたしました。衷心より御礼申し上げます。これほど綿密にして啓蒙的なお手紙をいただけるとは予期しておりませんでした。

お手紙にお書きくださったことを参考にジャーゴン〔失語症〕について注を一つ書きました。その一方で、先生の患者さんが読んだシャトーブリアンの文章を探してみました。先生のお話では、それは『墓のかなたからの回想』の一節で、オーロック(牛)とヴォー・マラン(アザラシ)という言葉が出てくるということでした。そこで私は(19世紀と20世紀のフランス文学の主要なテキストが入っているデータベース)フランテキストを検索してみました。その結果、『回想』には該当する文章が見あたりませんでした。『殉教者たち』*Les Martyrs*の第四之書に先生の記憶にぴったりあてはまる文章の一つ見つかったのです。それはこういう文章です。

熊やアザラシや牛や猪の毛皮を着たフランク族の勇士たちが遠方に猛獣の一群のように姿を見せていた。

はたして先生が四半世紀前に患者さんたちに読ませていたのはこの文章でしょうか?もし、そうだとすると、一つ素朴な疑問がわきおこり、ひっかかります。患者さんの読みの中には、「たぶん正しく読まれた」と思われるいくつかの章句があります。ところがそうした章句、たとえば *Lorsque nous l'essayons* とか、*lorsque les nouvelles qui... d'une fin dans l'autre* とか、*dans lequel* とかいった表現がこの『殉教者たち』の第四之書のどこにも見あたらないのです。ただし、そのことを別にする、先生が患者さんの朗読を聞いて「1/何かの戦闘あるいは戦場場面 2/高波」という印象を持たれたということにぴったりの内容なのです。覚えていらっしゃると思いますが、この場面はローマ人とフランク族の戦闘の場面で、最後は突然高波が起こって、ローマ人たちが敗走する場面で終わっています。

以上が先生の昔の知的冒険に対して、日本で試みられたちょっとした調査の結果です。すでに十分ご説明をいただいたので、ジャーゴン失語症患者の朗読テキストをきちんと日本語に翻訳することについては問題ないと思いますが⁽¹⁰⁾、できれば原文の出典を正確に知りたいものです。もしこの手紙をお読みになって記憶がもどられるようでしたら、ファックスないしは手紙でご一報くだされば幸甚です。

次のお便りを読む楽しみを心待ちにしつつ、わが親愛なる先生、私の衷心からの親愛の情をお受け取りください。

恒川邦夫

追伸。ほどなく（2月10日頃）パリへ2週間ほどの短い旅行を試みることにになりそうです。その機会にお目にかかれればと思います。お電話いたします。」

この1月29日付けのファックスに対するレールミット先生の返事があったように思うのだが、証拠となる書き物が見あたらない⁽¹⁾。次に私の手元に残されているのは、2月5日付けのファックスだから、その間に返事があったとすれば、ファックスか電話のいずれかである。いずれにせよ、2月5日付けのファックスを読めば、その間の事情を知るのには十分である。

「親愛なる恒川先生、
アップ
古文書万歳！ アンドレ・ロック＝ルクールが『精神の機能』に私が載せたジャーゴン失語症患者の朗読の原文を見つけました。

2, 3日ご猶予ください。モントリオール（カナダ）から私に送られてきたフォトコピーの質が悪いのです。先生にきちんと清書したものをさしあげたいと思います。

親愛の情をこめて。

レールミット

追伸。原文の作者が誰だか知れば、私同様、先生も驚かれるでしょう……」

なんとシャトーブリアンの一節というのは、レールミット先生の記憶違いだったのである。追伸にある「先生も驚かれるでしょう」というふくみについては、なんとも応えようがないが、ファックスでさきに名前くらい教えてくれてもよからうにという気持ちであった。

2月7日夕方、成田からロンドン経由でパリのホテルに着いた。ほぼ10カ月ぶりのパリだが、氷雨の降る寒いパリであった。翌日レールミット先生のお宅に電話すると、留守番電話になっている。メッセージを入れておくと、翌日ホテルに連絡があった。

来週旅行から帰るので、火曜日から水曜日の夕方にお越しいただきたい、18時以降、お待ちするというメッセージがホテルに届けられていたのである。

2月14日水曜日、18時少し前、6区のトゥルノン街14番地にある先生のアパートマンをたずねた。あいかわらず冷たい雨の降る憂鬱な冬のバリの夕暮れであった。トゥルノン街はリュクサンブール公園の北側にあるフランス上院の建物（リュクサンブール宮殿）からまっすぐセヌ川の方へのびた広い通りで、両側には見るからに立派な建物が並んでいる。しかも先生のお宅のある14番地の建物は近づいてみると、見覚えのある建物であった。3階に上がって、アパートマンのベルを押すと、ほどなく元気な足音が聞こえ、中肉中背、禿頭に丸眼鏡をかけた元気いっばいのレールミット先生が扉をあけて出迎えてくれた。電話中だったらしく、天井の高い部屋の壁面に絵画が埋め尽くしているサロンに招じ入れ「どうぞお楽に」と言うと、「ちょっと失礼」と隣室に姿を消した。広々としたアパートマンであるが、先生の朗々たる声音は開け放たれたままの隣室のドア越しに聞こえてくる。

やがて電話を終えた先生がシャンパンとグラスをもってやってくる。「さあさあよくいらしゃいました。あなたが見えるというので、シャンパンを用意しておきました。」そうして、それから2時間あまり、シャンパンをくみかわしながら、きれいにタイプアップされた失語症患者が朗読した原文と先生の分析が記された手書きのメモを前に（「サカナに」と言うべきか）、話はずんだのである。事柄の性質上、主導権はレールミット先生にあって当然だが、話題はかつて学会で招かれて日本に行ったときのことにまでおよんだ。こちらのちょっとした言葉にも機敏に反応する先生は、まことに談論風発とどまるところを知らぬというふうであった。75才という年齢にはとても見えない若々しさであるが、とくに、その知的好奇心の旺盛さと問題を前にするときとちどころにペンをとり、頭に浮かぶアイデアを紙に記す《筆まめさ》には舌を巻く。本題を離れるが、筆者には当時『科学者たちのポール・ヴァレリー』の校了を目前にして、論文の著者たちの死亡年を確認するという仕事があった。原書が刊行されてから十数年経つあいだに著者の半分近くがすでに故人になっている。著名な人々といえども、ネクロロジ―は日頃気をつけていて、新聞などで見たらメモを取るというふうにしていないかぎり、すぐに情報の大波にさらわれて分からなくなるのがつねである。そんな話をすると、先生は医学関係の者なら自分がアカデミーに問い合わせてあげようと親切に申し出てくださった。筆者が点鬼簿の朗読よろしく「ピエール・オジェ、マルセル・ベシス、ジャン・アンビュルジェ、ルド・ヴァン・ボガルト、ピエール・パスワン」などの名前を列挙すると、先生はそれを紙片にメモしながら、しき

りに首肯されるのであった。筆者の帰国後ほどなく送られてきた数枚のファックスで、この約束はきちんと果たされた。ただ約束されたまま、今日まで果たされなかったことが一つある。それは本題に関して、昨年末に受け取った手紙のような詳細な説明をあらためて書いて送ってあげようという約束であった。それを訳書に反映させる時間の余裕はもはやないことが分かっていたので、ありがたくお受けしながらも、約束の履行を先生にせまることはあえてしなかった。先生の方からはファックスで「ジャゴン失語症患者の朗読とその解説に関する解説を書いてみました。しかし残念ながら長くなりすぎました。ちょっと体調をくずしたこともあり、決定稿をお送りするにはあと2週間ほどかかりそうです」というメッセージが送られてきた。それから4カ月あまりの月日が経つが、先生からの便りはない。訳書はすでに4月末に刊行され、書評も2、3出た。ふと先生の健康が気遣われるこの頃である。筆者が本稿の筆を執ったのも、短期間ながら実り豊かであった先生との知的交流をこのまま埋もれさせずに、そのあとを記してのこしたいという気持ちがあったからである。

先生のお宅を辞去してから、通りの反対側にある中華料理屋に入った。私の知るかぎりでも経営者が3回変わっているが、私が20代の大半を過ごしたパリ時代から四半世紀にわたって、折につけ利用している店である。(先生のお宅のある建物に見覚えがあるのはそれゆえだ。) さして広くはないが、もの静かな界隈の雰囲気を反映して、座っているとゆったりとした気分になれるところがいい。料理が運ばれてくるあいだ、さきほど先生からいただいた資料を鞆から取り出して眺めてみる。くだんの原文というのはA. トマティスという人が1963年にパリのスーニョ出版社から出した『耳とことば』という本の書き出しの1頁からの引用である。寡聞にして、筆者は作者について何も知らないが、ルールミット先生によれば内容はさしてないけれど、平明である種のリズムとメロディーがある文章ということで選ばれたようである⁽¹²⁾。本稿のしめくくりとして、ルールミット先生自らが作成してお土産にくださった原文と失語症患者の朗読の対照並記を引き写しておこう⁽¹³⁾。

上のゴシック体が原文、下がそれに《対応した》朗読である。

Lorsque vous parlez, le son s'écoule de votre bouche comme le
 Lorsque nous l'essayons, le saint bronne de trou mauvaise lorsque les
flot qui déborde d'un bassin trop plein. Il inonde tout votre
 nouvelles qui démordent d'une fin dans l'autre. Il étaborde d'abord un
corps sur lequel il s'étale. Chaque onde syllabique se déverse et
 fort dans lequel il était. Dans chaque étome respulte, se comporte et
déferle sur nous d'une manière inconsciente mais certaine. Votre corps
 compoule comme tout d'un saint andiforme comme personne. Notre but
sait, par toute sa surface, en noter la progression grâce à sa
 sait tout d'abord sa conforme et compoule la sébelsion d'abord tout
sensibilité cutanée dont le contrôle fonctionne comme un clavier
 déborde [注1]⁽¹⁴⁾ dans la débolesse massive comme en symbole marsié
sensible aux pressions acoustiques. Ce n'est pas sans ahurissement,
 aux tréformes théoriques. Dans chaque sibande,
lecteur, que vous parcourez ces premières lignes. Peut-être, ce langage
 Monsieur, qui ne parcourt d'une façon. Comme le symbole trou prasuve
de prime abord vous paraîtra-t-il des plus hermétiques. Néanmoins,
 peut lui-même être parti quelque part. D'abord, il ne faut,

à ne rien vous cacher, nous sommes intimement persuadés qu'au cours de
 d'abord d'autres personnes ne peut tout d'abord comme
 ce petit ouvrage nous parviendrons à vous révéler toute l'évidence de ce
 personne vous dire une première fois d'où
 mécanisme.

il sort. [注 2]⁽¹⁴⁾

注

1. J. ロビンソン=ヴァレリー編, 菅野昭正・恒川邦夫・松田浩則・塚本昌則訳『科学者たちのポール・ヴァレリー』, 紀伊國屋書店, 1996, 482頁。原書は *Fonctions de l'esprit — Treize savants redécouvrent Paul Valéry*, textes recueillis et présentés par Judith Robinson-Valéry, Collection Savoir, Hermann, 1983。
 なお, 訳書は 1996 年第 32 回日本翻訳出版文化賞を受賞した。
2. 紀伊國屋書店の本にある菅野昭正先生の訳文は以下の通りである。(ただし, この部分の訳は筆者が先生に提案したものが土台になっているようである。とすれば, 文責は当然筆者にある。また紀伊國屋の現在の版にはいくらか誤植があるので, 以下はその部分を正してある。)「(……) 聖なるブロンヌ・ド・トゥルーは, 悪い, ひとつの目的からもうひとつの目的へと溢れ囁む知らせがあるときには (……) それぞれのエトムのなかで, レスピュルトし, 振る舞い, まるであるアンディフォルムのある聖者そのままにコンブールする (……) 我々の目的, それはまず最初はそのコンフォルムであり, そのベルシオンを許容すること (……) 理論的なトレフォルムにマルシエされた象徴のように重々しいデボレッシのなかで。」
3. エノ博士 Docteur Jean Hainaut はポール・ヴァレリーの初期 20 年間の『カイエ』の編集刊行に携わる研究者グループの一員である。科学畑に該博な知識をもっているので, 諸科学にわたるポール・ヴァレリーの知的関心のあとをとどめる『カイエ』の解説に時に大きく貢献する。誠実な人柄であるが, 頑固一徹という側面もある。自ら企画したこのシンポジウムのタイトル「真昼の分割」le partage de midi についても, 筆者がまだ在外研究でバりに住んでいたころのとある研究集会で披露されると, 「これではクローデルの学会と混同されるのではないか」(クローデルには有名な『真昼の分割』という劇作がある) という批判があいついだが, エノ博士は防戦にこれつとめ, 結局, 主張を貫いた。もっともあとから付け加えられた《^{ミディール・ジュスト}正午》という言葉は, ヴァレリーの詩の中で最も人口に膾炙した一編『海辺の墓地』の一句である。
4. André Roch-Lecours et François Lhermitte, *L'Aphasie*, Flammarion, Médecine-Science Edit., 655 p, 1979.

André Roch-Lecours, François Lhermitte and Bonnie Bryans, *Aphasiology*, Baillière Tindall Edit., London, 484p, 1983.

5. 「行商人」colporteur は「選挙人」électeur の、「上着」veste や「粉」「火薬」poudre は「票」vote, bulletin の、「最後の審判」suprêmes jugements は「(投票日における有権者の)最後の判断」の意味論的錯語になっているということであろうか。また「外套」manteau は「上着」veste の縁語でやはり「票」voteに通じる。

6. 英語訳は未見であるが、筆者の手元にある1993年に刊行されたドイツ語訳(訳者: マックス・ルーザー Max Looser)を見ると、本文にはフランス語ヴァージョンがそのまま引用され、それに訳注(Anmerkungen des Übersetzers)が付されている。

Da Tiefenstrukturen dieser Äußerungen im Text nicht expliziert sind, läßt sich hier nur der Versuch anstellen, auf einer phonetisch-lexikalischen Ebene ein deutsches Äquivalent wiederzugeben: der Gesunde bäumt sich seiner schlechten Öffnung, während die Neuigkeiten sich von einem Ende zum anderen überbeißen... In jedem verdrehten Etom vertopft und veruhnt sich alles wie eine gesund Andenform... Unser Ziel kennt zuallererst seine Anpassen im Enthalten des Sebellation... in der massiven Schwächigkeit wie ein kriegöses Symbol des thoretischen Dreformen.

(大意: 本文にはこの表現の深層構造についての説明がないので、ここでは音韻と語彙の両面から考えたドイツ語逐語訳の一つの試みを提示するととどめる: 「健全なる者は自らの悪しき開口部を自分に作る。その一方で新しいものが端から端まで噛んでいた口を離す……それぞれの捻れたエートムの中に、健全なる一つのアンデンフォルムのごとく、すべてが自らを鉢(Topf)や雌鶏(Huhn)に変身する……われわれの目的はなによりもまずその適応を知る、セベラティオンの内包のうちに……理論的なドレフォルムの一つの戦闘的な象徴のような大いなる脆弱さのうちに。)

このドイツ語訳を詳細に検討すると色々おもしろいことが指摘できそうだが、ここでは立ち入らない。ただ、原文のフランス語 saint「聖なる」を、gesundと訳して sain「健康な、健全な」の意味にあえて取ったのはなぜか。また全体として、構文上の整合性を重んじた訳になっている(随所に使用されている再帰代名詞の役割に注目)ので、原文の「わけの分からなさ」とはいささか違った趣の仕上がりになっている。comporteをvertopft, compouleをveruhnt, marsiéをkriegösと、原語の意味を解釈して訳す工夫(com→ver, por→pot→Topf, poule→Huhn, mars→Mars→Krieg, etc.)もおもしろいが、恣意的にすぎるといふ批判があってもおかしくないだろう。

7. この先生の二つのアドヴァイスのうち最初の「言語学的に異論の余地なくフランス語と認定される部分にきちんとした日本語訳をつけること」は一応実現可能であるが、二つ目の「ジャーゴン化され、少なくとも執拗な反復を示す音については、そうした反復によって醸成される音の響きとメロディーに近い日本語の音素ないしは音のみつけること」というアドヴァイスは日仏両語の懸隔を考えると無理な注文であるように思われる。

8. 「若きバルク」*La Jeune Parque* はポール・ヴァレリーの出世作の長編詩、「鳥たち」*Oiseaux* はサン・ジョン・ベルスの散文詩。なおこの後に引用されている詩句はすべてヴァレリーの「若きバルク」からの引用である。①は第253行、②は307行、③は146行、147行である。なおレールミット先生が矢印で示しているのは半階音 *assonance* (同一母音の反復) である。

9. 筆者の依頼に快く応じて助けてくれた友人、東京大学文学部の田村毅教授に感謝の意を表したい。auroch はシャトーブリアンの作品では uroch と綴られていた。『殉教者たち』はフランスのリセの学生たちが使用する名作の抜粋廉価版クラシック・ラルースの一冊に入っている。その点でも、レールミット先生の記憶と一致する。
10. これは修辞に過ぎない。実際は、翻訳する際の問題はまだまだ大きい。
11. たしか「……調査おみごとでした。思うところあって、かつての研究仲間であったカナダのロックニールクールに問い合わせているところです。私の方は、プライベートの問題があるので、資料はすっかり退官時に処分してしまいましたが、彼のところに古文書が保存されているようです……」といった内容の文章を読んだように記憶するが原文が見つからないのでいたしかたない。シャトーブリアンの文章を読ませていたのはもっと昔の話であったらしい。
12. 原書は A. Tomatis, *L'Oreille et le Langage*, Ed. du Seuil. 1963.
13. A. Tomatis の原文と大意を伝える訳文を以下に掲げておく。

Lorsque vous parlez, le son s'écoule de votre bouche comme le flot qui déborde d'un bassin trop plein. Il inonde tout votre corps sur lequel il s'étale. Chaque onde syllabique se déverse et déferle sur nous d'une manière inconsciente mais certaine. Votre corps sait, par toute sa surface, en noter la progression grâce à sa sensibilité cutanée dont le contrôle fonctionne comme un clavier sensible aux pressions acoustiques. Ce n'est pas sans ahurissement, lecteur, que vous parcourez ces premières lignes. Peut-être le langage, de prime abord, vous paraîtra-t-il des plus hermétiques. Néanmoins, à ne rien vous cacher, nous sommes intimement persuadés qu'au cours de ce petit ouvrage nous parviendrons à vous révéler toute l'évidence de ce mécanisme.

(大意：みなさんが話をするとき、いっぱいになった洗盤から水があふれるように、音が口から流れ出ます。音はみなさんの体をすみずみまで浸し、体の上にひろがります。音節波が起こると、意識されませんが、確実に押し寄せてきて、わたしたちの上で砕けるのです。みなさんの体は、全表面で、その進行を感知します。それは皮膚感覚のおかげです。それは聴覚圧力に反応する鍵盤のように反応します。読者のみなさん、みなさんはきっと読みだしてしばらくは何のことか分からないかもしれません。おそらく、最初は、言葉を理解するのがとてつもなく困難に思われるでしょう。しかし、はっきり申し上げます、私たちはみなさんがこの小著を読みすすむにつれ、上述のメカニズムについて、かならずや十全な理解が得られることを内心確信しているのです。)

14. [注1] [注2] はそれぞれ朗読途中で患者のエリザベート・CH***嬢 (1970年4月、パリ・サルベトリエール病院) が言葉を発したところを示す。その内容は以下の通り。

[注1] : Oh ! là, là ! Mon Dieu ! Je ne saurais pas le dire, tout ça. Vraiment c'est très difficile. (「ああまったく、神様！ とてもこんなの全部言えないわ。ほんとに難しい。」)

[注2] : Vraiment, c'est très difficile de lire quelque chose de nouveau. (「ほんとに、なにか新しいものを読むのは難しいわ。」)